



巻 頭 言

水田の雑草防除で思うこと

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事 上 垣 隆 夫

子供の頃、いろいろな手伝いをしたのですが、「田の草取り」ほどいやな仕事はありませんでした。雨降りの時は雨具を着るので気がふさぎ、炎天下では汗をかいた顔に稲葉がすれてこれまた不快なものでした。それに水田では、草を取った後が綺麗さっぱりとしないので、仕事の満足感が得られませんでした。

「田の草取り」は、数ある農作業の中でも、暗いイメージの最たるものではなかったでしょうか。田植後間もなく田打車を押し、その後一番草、二番草、三番草と3回の手取除草が行われていました。

我が家でも昭和26年に初めて2,4-Dを使用しました。父と二人で散布したのを思い出します。稲は枯れずに草だけ枯れるのを見て、驚いたものでした。その後除草剤による除草技術は日本全国に急速に普及し、田打車を押したり、這いつくばっての「田の草取り」は一昔前の風物詩となってしまいました。

水田除草剤は肉体的にも精神的にも過酷な「田の草取り」から農民を解放してくれました。また、農民に多い腰曲症の防止にも一役買ってくれました。今では農村でも杖をついて歩いている老人は非常に少なくなりました。このように、除草剤は、四つん這い作業を立作業に変え除草労力の削減と作業強度の軽減に多大な貢献を果し、水田の除草作業は省力化と快適化の面で飛躍的に向上いたしました。

現在では雑草防除と云えば除草剤と云われるほどに発展普及していますが、除草剤に対する過度の依存に対して懸念する声も聞かれます。除草剤に頼るだけでなく、他の防除方法と組合わせて必要にして最小限の除草剤使用の方策が求められています。

最近、雑草群落の遷移の解明、防除要否の判断基準、雑草の防除水準、雑草防除診断予測、雑草の発生予測といった言葉があちこちで聞かれるようになりました。また、合理的な雑草防除技術を組立てるために、その基礎的知見として、雑草発生予測技術の確立の必要性が認識され、この分野の研究に励んでおられる方々も見受けられます。

農水省の方針によりますと、「これからの稲作は、我が国の自然経営条件の下でも普及し得る日本型直播稲作技術を確立、普及していくことが必要不可欠」とされています。直播栽培が将来どれだけ伸びるかは判然としないところですが、水稻作における雑草防除の比重がより一層高まることは明白です。

現状の雑草防除は、防除基準に準拠するか、個々の農家の経験に基づいて定期的に除草剤散布が行われている状態であり、その年の雑草発生に適合した防除が行われているとは云えません。農業に対する規制が厳しくなる中でこの面からも雑草の発生生態に即応した適期適法の防除が望まれるところであります。発生予測に基づいて行う防除が、防除効果の面でも、作業効率の面でも良好な方法であることは大方の認めるところであります。

雑草の発生予測という新しい気運が高まりつつあります。ここらあたりで行政的にテコ入れをし、雑草の発生予測に向けて全国的に組織的な取り組みができないものでしょうか。「水田雑草発生予測実験事業」の声が聞かれるようになることを願うところであります。

「精農は草を見ずして草を取る」と云われていたようですが、「精農は草を見ずして草を知る」というようになりたいものです。